

セフェリスのバイディア
—— 幼少時代の父と子

志 田 信 男

§. 1 プロロゴス

1988年秋、セフェリスの詩「キプロスのサラミス」を論じた小稿の中で、結語として、次のように述べた。

『以上「キプロスのサラミス」で、セフェリスがアイスキュロスの<サラミス>を重ね合わせ、さらにキプロスにまつわる幾多の戦闘やレバントの海戦に想いを走せていることが明らかになったと思う。そして彼がそれらの出来事の背後に一貫して、アテ---ヒュプリス--ネメシスの連環による<神の正義>を見ようとしていることも明かである。先に一寸触れたように、もしかすると彼は、「かの完膚なき災厄」の一句の中に、彼自身が体験した1923年のケマル・アタチュルク軍によるスミルナ（現イズミール）の「大災厄」までも想起しているかも知れないのである。たしかに第一次大戦後のこの時期ヴェニゼロス指揮下のギリシアもまた、「新ヴィザンチン帝国」建設の夢、いわゆる「メガリ・イデア」（偉大なる思想）の実現を追求するあまり、ヒュプリスの罪を犯していたのかも知れないのである。ニコス・スポロノスのいうように、当時のギリシア軍の行動はほとんど「侵略戦争の様相を帯びて」いたのである。山内登美雄氏は、「アイスキュロスの人間に対する態度の根本」を「ベルシア人」が「実に明確に示唆する」とした上で、「アイスキュロスは死ぬまでマラトンの勇士であり愛国者であるが、単純な熱狂的愛国主義とはまったく違っていることが知られる。ベルシア敗北の原因を、権勢に溺れ、暴勇と瀆神をほしいままにしたクセルクセスに対する大神ゼウスの懲罰にみるアイスキュロスは、神々の正義とその前での人間の愚かさを、同じ人間の立場から劇詩として描くのである。

アイスキュロスが愛国者でありながら、このように公平で普遍的な地平に立つことができたということは、まことに驚きである」と述べているが、セフェリスの視野にも、自国民の災厄の背景と同じヒュプリスの影が映ったとしても不思議ではないのである。しかも彼の父はヴェニゼロスのブレインでもあったのである。<サラミス>の思想そのものが、他ならぬ彼の父からのものなのであるが、彼もまたアイスキュロスと同じく様々の人間の業とそれから生じる様々の結果を普遍の高みから一望に観照し

うる人格だったと思われるからである。セフェリスにおける古代ギリシア的ヒュプリス観とギリシア正教徒としての神観とのかかわりなどについては機会を改めて論じてみたい。」¹⁾

いざさか引用が長くなつたが、セフェリスの運命観であるアテー--ヒュプリス--ネメシスの連環による運命の、あるいは歴史の運動観の凝集された事件が、サラミス海戦であることや本稿の主題である<セフェリスのバイディア>の問題とも深くかかわっているのであえて冒頭にあげた次第である。

すでに機会あることに指摘したように、セフェリスは外交官としてのエリート・コースを歩む一方で、詩人として、学問人として、国民的教育者として、評論家として、愛国者としての誠実な人生を歩んだ人である。深い古典的教養と近代ヨーロッパ的知性をそなえたギリシア人である。この点に関し、ヨルゴス・D・フルムジアーディスは、セフェリスの処女詩集「転回点」に触れた箇所でのように述べている。

「これはその内容からはもちろんだが、その作者に備わっていると思われる多様な長所のゆえに“驚異の”書だった。セフェリスが際立った才能のなかに、全く並外れた教養を蓄えていることは明かだった。

古典、ヴィザンティン、世俗のギリシア文学についての精通者であり、近代の最も重要なもののうちに数えられるフランスおよびイギリスの文学についての十分な識者であることが、当初から証明されていたのだ。こうしたすべての源泉を、彼は現代ギリシアの現実に調和させて取り込める限り、うまく吸収した。新しい観念や要素を形式や言語—愛する民衆語—に適用させることにより、セフェリスは伝統と断絶することなく、“純粹”—ポール・ヴァレリヤブルモン神父によって構想されたもの—の実現に向けての大きな一歩を成し遂げるのである。」²⁾

全く正鵠を射た見解であり、セフェリスがこのような、古典文学だけでなく、近代西欧文学に通じたインテリゲンチアの一人である以上、その思想のよってくるところを、西洋およびGreek heritageにもとめることはごく自然であり、実はそれに尽きているといつてよいのかも知れない。がこのようなGreek heritageの流れの中で、やはり直接かれに影響を与えた人物がいることは否定できないのである。手許にある資料によるとセフェリスにおけるギリシア的運命観は、どうも直接的には、父ステリオスの影響が決定的であるように思われる。「セフェリスのバイディア」—幼少時代の父と子と本稿でいうのは、実はこの意味なのである。

ところで「セフェリスのバイディア」と一言でいっても、よく考えてみるとsemanticな観点から、とてつもなく広い、あるいは多方向にわたる視点が可能のように思われる。そもそも「セフェリスのバイディア」というタイトルにおける「～の」に問題がありそうである。この「の」は subjective genitiveなのか、objective genitiveなのか、それともその両方なのか。前者と考えれば、セフェリスの若年期の意識的な文学修業や英語の勉強などがあげられようし、エリオットやジュール・ラフォルグや

ポール・ヴァレリー等西欧の詩人たちとの邂逅・その影響や栄養の摂取同化やマクリヤノスや画家セオフィロスの発見・評価の過程をもあげられるかも知れない。否、人生の経過における全ての体験・学習を含めて、セフェリスのsubjectiveな認識・体験のプロセスの総体を含めねばならないだろう。またobjectiveと考えれば、幼少時からの私的・公的教育の過程が考えられるであろう。師グーティスによる教育や後年のカサレヴーサ対ディモティキに関する師弟の対立もとりあげねばならないだろう。そもそも、主体と客体との相互の働きかけ、受容と消化、独立と独創とがなくて「バイディア」そのものが成立しえないであろう。この意味では、subjectiveかobjectiveかという設問自体が愚問というべきかも知れない。教師は学生を教えることによって、絶えず触発され、教えられている。その意味では、現代日本の教育界をおおっている、人を横一線、縦一線に並べ、教える側が教育を受ける側の主体にはおかまいなしに、超越的・一方的に相対的数量的な評価を下す偏差値教育が、いかにバイディアの本質を逸脱したものであるかは明かであろう。

いずれにせよ、究極的には、この subjective および objective の立場を止揚した「セフェリスのバイディア」が論じられなければ片手落ちとなる。がそれは限られたスペースで軽々に論じ尽くせる問題ではないであろう。

がしかしひるがえってここで本稿の出発点、「幼少時代の父と子」というサブタイトルに示した視点に立ち返ることによって、小論の取り扱う範囲も限定され、筆者の意図も明らかになるはずである。父と子、セフェリスの父スティリアノスとセフェリスの間におけるバイディアの問題、それも、セフェリスに見られる先述<アテー---ヒュプリス---ネメシス>の連環による古代ギリシアの運命観、その運命観の史的凝集点としてのサラミス海戦についての父スティリアノスの影響について書いてみたいというのが、本稿の出発点なのである。

§. 2 父、スティリアノス

セフェリスの父スティリアノスについて、ここで、人名辞典の記すところを要約してみよう。以下は、アテネで1988年に出版された世界人名辞典³⁾からの要約である。

スティリアノス・セフェリアディス (Στυλιανός Σεφεριάδης) は、1873年スミルナに生まれ、1951年アテネに没した。すぐれた国際法学者、外交官、作家、大学教授であり、アカデミー会員であった。現代ギリシアの傑出した詩人、ヨルゴス・セフェリスとヨアンナ・ツァツォスの父・スミルナの福音主義系の学校で普通教育を終え、フランスのエクス・アン・プロヴァンスで法律を学んだ(1894年優秀な成績で卒業)。またパリ大学(1897年、法律博士)。故郷に帰還後、弁護士として傑出、平行して、法理論の研究と著作に没頭した。

1919年、アテネ大学法学部の国際法の臨時の、ついで翌1920年正教授に就任。この

地位は1938年（1920-23を除く。この期間はベニセロス派の一員（Βενιζελικός）としてこの地位をはなれた。ヨアンナの手記にあるように、ヴェニセロスの側近、おそらくブレインの一人だったと思われる。）まで維持する。更に国務省の法律参事官（1919年）ハーグの紛争調停裁判所の常任メンバー（1920）、政府参事官（1929）、アテネ大学学長（1933-34）、そして1933年、アテネのアカデミー正会員に選出される。最後に、国際会議及び外交的会議に繰り返し代表として出席した。（諸民族の学会組織等）、また国際学術者協会のメンバーとして優れた活躍をした。（国際法学会会員等）。スティリアノスの学問上の著作は、フランス語とギリシア語で書かれ、その数は非常に多い。彼の多くの研究は、法律雑誌に公表された。何冊もの彼の著作の選集があまれている。

学位論文「訴訟論に関する批判的研究」（*Étude critique sur la théorie de la cause*, 1897）、「国際法の将来」（*Το Μέλλον του Διεθνούς Δικαίου*, 1920）、「国際公法教程」（*Μαθήματα Διεθνούς Δικαίου*, 2T., 1925-29）、「住民の交換」（*Η Ανταλλαγή των Πληθυσμών*（*L'Échange des populations*, 1928））、「平和の国際法の一般原則」（*Principes généraux du droit international de la paix*, 1930）、「ギリシア古代法における中立の概念」（*La Conception de la neutralité dans l'ancien droit hellénique*, 1935）および「国際法慣習概論」（*Aperçu sur la Coutume juridique internationale*, 1936）等。

法律に関する研究の他にスティリアノスは、青年時代から文学の道にいそしんだ。（この文学に対する愛好が子供たちに引き継がれたことは明かである。）1902年には、詩のコンテストに賞金をかけたりしている。この分野での彼の出版物としては次の著作や翻訳がある。

『わが引出しからの詩的集成』[（1895-1912(1939)）]（*Η Ποιητική Συλλογή από το Συρτάρι μου*、戯曲『アルタの犠牲』（*Η Θυσία της Άρτας*（2幕ものの劇））、『愛の狂人とゴート人』（*Τρελός από την Αγάπη και Γότθοι*（未出版、未刊））、ギリシア関連のバイロンの詩の翻訳、『バイロン脚』がある。『ギリシアのための彼の悲劇』（1924）、またソフォクレスの悲劇の有韻詩としての翻訳（『オイディプース王とエレクトラ』、1936）、翻訳家としてのセフェリアディスは、ステファノス・ミルタス（*Στέφανος Μύρτας*）のペンネームを使用した。

少し詳しく紹介したが、セフェリスの父の公的な姿はかなり具体的に浮かび上がってくるであろう。セフェリスが知的にも社会的にも生え抜きのエリートであるという意味もこの父を考えたら偶然ではないのである。

ところでこのような学者であり法律家であるといういかめしい経歴のスティリアノスも、家庭では、子供たちには大変優しい父親であつたらしい。後年父との間に文学修業と法律の学位取得の勉強をめぐって、どこにでもある父と子の対立があつたよう

であるが、セフェリスもまたトータルな観点からすれば父にとって善き息子であった。この間の事情は、セフェリスの妹、ヨアンナ・ツァツォスの記述に詳しい。父スティリアノスの「fond father」ぶりもよくえがかれていて微笑ましい。そしてその文章の中に、セフェリスのバイディアとしての<サラミス>も出現するのである。

§. 3 ヨアンナの書く父スティリアノス

セフェリスは、敬虔なギリシア正教徒であったが、一方根本的なところで古代ギリシア以来の運命観を持ち、ギリシア的、というより古代的宗教観にも親近観を持っていたように思われる。すなわち、ギリシア悲劇—とくにアイスキュロス以来のアテ—ヒュプリス—ネメシスの連環による人および国家の運命観である。彼はことあるごとにこのことに触れる。それもペルシア戦争におけるサラミス海戦とのかかわりにおいて、クセルクセス大王の運命に触れる形であることが多い。詩集『航海日誌Ⅲ』中の一編「キプロスのサラミス」についてはすでに触れた。いずれにせよセフェリスのサラミス海戦へのこだわりと、アイスキュロス、ひいては古代ギリシア的運命観に関する関心の深さは、早くから筆者にとっては興味を引くものであった。この点に関しては、「セフェリスとアイスキュロス」⁴⁾と題する小文においても触れたことがあるが、初めこれを、単純に<Greek Heritage>の文脈の中で解釈していたのである。ホメロスを始め、悲劇作品などを虚心によめば、ギリシア思想の根幹は「中庸」であり、人間が人間の分限を超えようとするとき、そのような迷妄（人はこれをアテと呼ぶ）とその迷妄の結果としてのヒュプリの行為に対して、必ずネメシスの罰が下るのである。だから、古典文学にも古代思想にも通じていたセフェリスにとって、このような思想的到達点は、要するにギリシア的素養と心性の必然の帰結と考えていたのである。ところが、サラミスに関するセフェリスの思い入れの直接の原点が、どうやら父のバイディアにあるらしいことが妹ヨアンナの証言で明らかになる。

ヨアンナ・ツァツォスは、その著『わが兄セフェリス』⁵⁾の中で幼少時代のセフェリアディス一家の生活を生き生きと画いているが、その中でまず母デスポについて、次いで父について多くの貴重な証言をしている。兄セフェリスについてはもちろんである。この本は肉親による直接的資料として、セフェリス研究にとっては、貴重な証言にみちた興味深い本である。実をいうと、拙著『セフェリス詩集』（土曜美術社、1988）⁶⁾にあたって、筆者はこの本を未見であった。もし読んでいたら筆者のセフェリス観、特に彼の<フェミニズム>もしくは、<女性観>について一つの知見を加えることができたかも知れない。詩の解釈についても同様である。従来、重厚で暗いとされていたセフェリスの詩も翻訳してみて、以外に軽快な「色っぽい」詩があるのに気がついてきたが、これも偶然ではなかったようである。詩中のピリオ⁷⁾なる女性に

ついても、ヨアンナは触れている。筆者が所有しているのは、この本の英語訳であるが、簡潔で美しい文体で賞かれた、これ自体が文学の名に恥じない名著である。ヨアンナ・ツァツォスも父の文学的資質を十分に受け継いだようである。

さて前述のように、父スティリアノスは、国際法の権威であり、アテネ大学教授として、また翻訳者、詩人、としてもすぐれた素質を示していた。またヴェニゼロスのブレインでもあり、ヨアンナによれば彼がバリで狙撃されたときは同行していた。従って共和国主義者であり、おそらくメガリ・イデアの信奉者でもあったと思われる。しかし、家庭では、子煩悩な優しい、ほとんど親バカともいえる父親だったようである。以下、ヨアンナの描写に聞いてみよう。

「晩になると、私たちは、父が、お休み、を言いに来るのをベッドの中で待っているのです。私たちが幼少だった頃、彼の私たちに対する優しさは、無限でした。何時間もかけてヨルゴス（セフェリス）のために船倉やマストや可動の舵柄のついた木製の小舟を彫んでくれました。彼はこういうことが大変上手でした。彼は大きなクルミを選ぶとペンナイフでくり抜いて—どうやってだか想像もつかないのですが—開いたり、閉じたりする小箱を私のために作ってくれたのです。私たち子供たちは、周りに立って、一生懸命その姿を見つめていたものです。仕事をしながら彼は色々のお話をしてくれました。

彼は詩人でした。そして子供たちの心にひびく伝說的要素を選び出すべを心得ていたのです。非常に幼い頃の記憶の一つは、彼のひざに座っていた頃のものです。ヨルゴスとアンゲロスはかたわらにいました。私たちは、彼の話にうっとり耳を傾けていました。生き生きした単純な仕方では説明しました。クセルセス大王が軍勢をもよおし、橋をかけ、ギリシアを征服せんと殺到した有様を。彼はサラミスの勝利について、私たちに話してくれたのです。ヨルゴスは大柄な少年でしたが、「何隻の船がいたの？クセルクセスは何処に陣取ったの？」と質問するのです。私はといえば、戦略にはかかわりなく、ただ起こった出来事を聞きたいだけなのです。

夕食前の父親とのその時間をどれほど熱心に、私たちは待ち焦がれたことでしょう。彼が帰宅するや否や、私たちはあとを追いまわすのです。

「今日はどんなお話をしてくれるの？」アンゲロスと私は彼にスリッパをもっていきます。彼はまるで私たちを魅了することを企てるかのように、ミステリアスな微笑を浮かべてアーム・チェアに腰を下ろすのです。

「こうして、アレクサンドロス大王は、猛々しい馬にまたがり、軍隊をひきつれて、アジアに進軍したのさ。そして勝利を、常に勝利を取めたのだ。当時大てい人はギリシア語を学んだのだよ。そしてアイソーボスの寓話を読むことができたのさ。—そのうち、お前たちにも読んであげるよ。」⁸⁾

「何千という職人や名匠が聖ソフィア寺院を建設したのだよ。そして工人の長は学問のある人（々）だった。聖人でもある画家がイコンを画いたのだ。数え切れないほ

どの御燈明が上がっていたのだよ。そんな寺院がどうして今後二度とつくれると思う？
聖母マリア様があそこに永遠に鎮座しますのさ。」

でも、彼の話がコンスタンティノポリスの陥落のくだりにくると、子供たちの6つの目は涙を一杯浮かべて彼をじっと見つめるのでした。

「コンスタンティノス帝は逃げられなかったの？」

「もちろんできたさ。でも彼はそうはしなかった。彼は殺されることを選んだのさ。」

「でも何故殺されるの？」私たちは質問します。

「もし逃げ出したら、大理石像にはならなかつただろうからさ。そして私たちは、いま彼の生き返るのを待望しないだろうからさ。」⁸¹

こうして一日一日、彼は私たちの熱心な心に歴史をそそぎ込んだのです。

これがセフェリスにおける父のバイディアだったわけである。この証言で明らかのように広義のGreek Heritageの中で、しかし狭義の家庭内教育の場でセフェリスに決定的な影響を与えていたのは、父スティリアノスなのである。セフェリスのバイディアの担い手は、まず第一に家庭であり父母だったのである。母のバイディアについては別に論じたい。

が上に引用した一節の終わりの部分で、ヨアンナは書いている。

「子供たちは成長するにつれて、両親の<徳>にうんざりするのです。家庭の月並みな日常生活が、彼らが厳しく判定する退屈な欠陥を明かにするのです。こうして年がたつにつれて、父の権威主義的な態度を抑圧的であると思うようになったのです。」⁹¹

父とセフェリスの間には、やがてこうして父の権威に対する古典的な反抗・葛藤が生ずるようになる。日常生活レベルでのことから、法律の勉強をおろそかにして、文学に傾斜する彼に対する父親の心配など、きわめて月並みなとも思える様々の葛藤が生ずるのである。しかし、いずれにせよ、セフェリスにあって、幼少時、父のバイディアは、いわば、ローレンツのいう「すり込み」(imprinting)の役割を果たしたに違いないのである。セフェリスにおける<サラミス>は、父のバイディアの最大の遺産だったのかも知れないと思うのである。

注

- 1) 「セフェリスにおけるサラミスの意義—「キプロスのサラミス」(航海日誌Ⅲ)をめぐって」志田信男, 東京薬科大学一般教育研究紀要, 第9号, 1987, 88 合併号, p.69-86
- 2) 『ギリシャ文化史[古代・ヴィザンティン・現代]』ヨルゴス・D・フルムジアードイス著 谷口勇訳, 而立書房, 1989, p.254
- 3) *Εκπαιδευτική Ελληνική Εγκυκλοπαίδεια, Τομος 9Α, ΠΑΓΚΟΣΜΙΟ ΒΙΟΓΡΑΦΙΚΟ ΛΕΞΙΚΟ, Ekdotike Athenon S.A., Athens, 1988 S.V.*
- 4) 「セフェリスとアイスキュロス」志田信男, 日本ギリシャ協会会報, 第41号, 1987
- 5) My Brother George Seferis by Ioanna Tsatsos, A Nostos Book North Central Publishing Company, 1982
- 6) 『セフェリス詩集』志田信男訳注, 土曜美術社, 1988
- 7) 詩集『転回点』中の「あなたはゆっくりと話した」に登場する女性。ヨアンナはこの女性を好意をもって回想している。『セフェリス詩集』p.8参照。また、I.ツァツォス著, 前掲書 p.173ff参照。
- 8) I.ツァツォス, 前掲書 pp.6-7
- 9) I.ツァツォス, 前掲書 *ibid.*

(参考文献は、おおむね引用文献と重複するので特にここでは挙げない。)